Wason
HQ
1104
J224

July 1903
no. 518

女學雜誌

第五百十八號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第五百十八號目次

◎社説
無意識論（無我、無心、無念、無想、自得、大悟、至誠、及び神に入り妙に達するの境界
武術流行の機運（女學校の薙刀科）

◎隨感
執拗き暑さ◎一陣の清風◎夕ぐれの凱旋◎拂曉戰鬪の準備◎道の案内◎源平盛衰◎小松殿の苦衷

◎女學
文明風家庭の破壞
故齋藤冬子の日記文

◎光瀾之觀
記錄……………………………………………………奥　遂
不我の言（一、二、三）。

◎雜錄
排女役者………………………………有　美
田舍……………………………………黑　光
陣言新囈………………………………鵑　村
道悅……………………………………柳　子
東山老翁の勝海舟談
平言凡語………………………………有　美
獨囈錄…………………………………無　美

◎時事
夏休中の女學生◎成功のおしへ◎信川の代現◎樂しき旅行◎洋樂の流行◎避暑のあそび

◎寄書
慈らぬめぐみ（信陽一女）

第五百十七號（七月十日）目次

◎社説　自由、平等、博愛の三標語◎「國家の爲」虛僞の辨◎大政一發の感（附勝安房維新の建白）◎女學冒頭の輕斷者

◎隨感　巖頭の感◎戰には戰死者ある也◎汽車走らず◎若王寺山上雨后の景◎雜道◎神秘默想

◎女學　古の女學◎理想の男子◎女子の中等教育程度に於る英語の研究（山形東根）

◎光瀾の觀　花觀の釋並に近棲の謬◎英文隨感◎記錄（新井奥遂）

◎雜錄　近親結婚有害の哲理（青柳有美）◎年少哲學者を弔ふ（四内天行）◎白百合（左琴女）◎坪城先生を挽す

◎寄書　青柳有美氏の美術經濟論（一生）

第五百十六號（六月廿五日）目次

◎社説　時代の酷弊自主自由を欠くにあり◎孰か女學を隆盛なりと云ふ

◎隨感　艱難歷道中の欣喜◎聖人は世と相移る◎古池や◎天及び大人◎賴むまじきは人か我か◎基督の教は情死なり◎蛇とクロムエル◎叛臣傳◎夕ぐれの小疑◎日の愛相◎夏冬の衣

◎女學　新しき女學とは何ぞや◎家庭は莊嚴の道場なり◎一葉女史を憶ふ◎一枝の花（鴨夢）◎茶道の辨（有翁）◎理想の男子（婦人運）

◎光瀾之觀　光瀾之觀◎大拔の女訓（新井奥遂）

◎雜錄　美術經濟論（青柳有美）◎某國女學生の抱負（紹介者某女）◎パンヤ開店の記（黑光女史）◎一掬の水（左琴女）◎薩摩琵琶行（西幸吉氏談）◎獨囈錄（無美）◎倫校山登万和作◎カーライルは英雄なり勝海舟なり◎武邉老人雜話

期日	前金		廣告料		送金
毎月二回（十日、二十五日）發行す	壹冊定價 半年分前金 一年分同	拾錢 壹圓 武圓拾錢	一行（十七字詰）一回 一段　同 一頁（三段）同	前金拾錢 三圓半 九圓	送金は東京巣鴨郵便支局に宛て小爲替にせられたし◎郵便切手にて送らるゝ人は惣べて一割增にて計算せられたし
	◎代金は惣して前金にて御注文ありたし◎年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送するも可有之事◎但し其節は惣て一册十錢の割にて計算し追て請求可致事是れ亦に不本意乍ら計算の煩はしき不得止左樣仕候間かれて御承知被下度候				

大賣捌
東京　東京堂
東京　北隆館
大阪　文淵堂

明治三十六年七月廿五日發行
明治三十六年七月廿五日印刷
發行兼編輯人　巖本善治
印刷人　布川孫市
發行所　東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地　女學雜誌社（特電番町千一番）
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍（電話新橋十八番）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌
第五百拾八號
明治三十六年七月二十五日發兌

社説

無意識論

無我、無心、無念、無想、自得、大悟、至誠、
及び神に入り、妙に達するの境界

「意識」なるものゝ本躰は、暫らく言はず。意識そのものゝ働らきは、申さば、「自覺」の如きものである。人は、其の爲す所ろの事に對して。自覺する時もある、自覺せぬ時もある。自覺するとは、其の所行を自分で心に覺え居るとて、申さば、吾が心中の眼を以て吾が心を見、吾が一身の眼を以て吾が一身の爲す所を見、一々吾の我たる吾が奧殿の鏡に映る其姿を自から見るので。之を「自覺す」とも言ひ、また「意識あり」とも言ふ。而して、玆に本題に掲げたる「無意識」とは、此の自覺即はち意識のなき事、自覺の感、活動せず、意識の鏡、姿を現ぜざる事を申すのである。

扨て此の「無意識」なるものゝ理を明白に辯明し、自修鍛錬の一警語と爲すとは、目今極めて肝要なると思はれる。敢て、心理學上の閑問題を論究するの主旨では無い。

「無意識」、即はち「自覺せずして事を成す」と云ふとは、放心無頓着で勝手我儘の事を成すとは、大に違ふ。掛念し、心痛し、煩悶し、苦き深慮を爲したる末、遂に無意識の狀態に至るのである。多年、經驗練磨して、同じ事を同じ様に長く〱繰り返したる後、遂に無意識の狀態に至るのである。故に、無意識とは、有意識の積もり積つたもので、「大いに意識ある」の末、遂に「大に意識なき」の狀態となるのである。例へば、吾々が幼稚の時は、茶碗を左に持ち、箸を右に持ち、夫で御飯を喫べると云ふ一大學科を初めて敎えられる。中々容易に出來るものでは無つた。夫が、日に數度、年に幾百回と云ふもの、くり返し〱て、遂に我知らず、サラ〱と茶

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

潰をかき込むに至る其間は、余程の經驗を積んだものである。之が初めの有意識的所行より、無意識的練磨に至るの一例で、「アンヨが上手」より、レースの驅競に至り。を頭テンテ、アペベより、舞踏唱歌の大發達に至るまで、皆な、經驗を積み、吾知らず巧妙に達するの類例である。

左すれば、人の成す事物は、遂に無意識で之を爲し得る程と爲つたるが、即はち、眞の「卒業」である。無意識に判斷し、判斷して自から論理を意識せざる程に至つたるが、「悟り」である。物の極意を承知し乍ら、其承知せるとをも自から意識せざるに至つたるが、「自得」である。無意識で事を爲す時の吾心は、「無念」「無想」で、又「無我」で、又「至誠」である。凡そ、此の無意識の境界が段々に擴張さるゝが、眞の進歩で、進歩も、無意識の所に至つて、一先づ一段落を遂げたのである。然し、一旦、無意識となるほどに進歩を了したる後に於て、再たび次の進歩が初まる。此の初まりかけは、又々有意識の境界である。此の第二期の有意識界を重ね積もつて、遂に亦た無意識に達し、玆に第二期の卒業を遂げる。此の卒業と共もに、第二期の悟り、第二期の自得等を得たのである。

斯樣にして、自得の上に、自得あり、悟りの上に悟りあり。「我大悟三たび、小悟其數を知らず」と云ふ程に、駸々進歩する人もある。

故に、神田つ子の兄貴が「ベランメー、生命ナンザ、入ラ子ーヤ」と言ふ、潔よい、決死の自得から比べ見れば、生中の書生が議論に日を消して憶病がる不決心よりも、遙かに優つた樣にも見えるが、渠神田の兄イは第一期の無意識狀態に居るので、此の書生サンは第二期の有意識界にさまよひつゝあるのである。無論、一段上の程度には存すれども、未だ無意識的狀態まで達せざるうちは、斯樣に弱く、かぼそく、不決心で、悟りもなく、又安心もないのである。

夫故、無意識的の卒業期に達する迄の中には、疑惑、煩悶、躊躇、不安心等の暗境を經過するとあれ共、夫は避く可らざる事である。之を恐れては、後の卒業は得られぬ。たゞ〳〵速かに此の暗境を經過し得るとが肝要で、其の速かに經過するは、何に由る乎と言ふに、苦學、勉强、眞面目の經驗、長き〳〵同じ繰返に忍ぶと云ふ事より外に無いのである。

然るに、今の時弊は、何事に於ても、此の「無意識的狀態」が

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

無いことである。一藝を爲すものも、藝に達して無意識に演奏するほどの妙手とならぬ。仕事を爲す事業家も、其仕事に慣れて、無意識で之を爲すほどの事業家とならぬ。學校の先生にも、無意識の領分が少ない。宗教の傳道師すら、事々に辨論するの爲體である。文人、文を作るに、無意識の時少なく、武夫、劒を揮ふに、思案斗りして居る。何事も、勘定して、何事にも、思惑があり相に見える。慈善家も、右の手の爲す所を、左の手が能く意識して居る。道德家先生も、其の品行行狀を、鼻の先に意識して居る。相思相愛の中にも、金錢づくの趣構がある。交友相交はるの中にも、黨派的の掛引がある。凡そ、何事にも、無意識の狀態を見ることが少ないので、見るもの丶心に、感激が起らず、不愉快極まる。人心萎靡の一原因も、一つは玆に存する。

願はくは、世上。「無意識」と云ふことを希望する理想が隆んになり。事物が無意識狀態に達する迄は、少しも苦學工夫を止めぬと云ふ覺悟が、大に奮起する樣にあらせたい。無意識狀態に達して、自得あり、無我あり、大悟あり、至誠あるに至る迄は、卒業と思はぬ。此の狀態に達する迄は、一事一業が成就せぬと、自から承知すれば、今日の樣な、空走や、過たる讀書や、譯もないお騷ぎは、自然と無くなる。今日の思想界は、浮氣ものである。たゞ新らしい方にのみ目が移つて、一度も家庭が出來ぬ。今日の名士は、大抵、講釋師である。講釋も、慣れた講釋でなく、毎日新らしいものを字引で引ながら講釋するのである。一つ押して聞けば、自から信じて居るのではない。信ぜざる、尚可なり、疑がふことすら初めぬ。一度も疑がつたことが無いのであるから、永久確信することも出來ぬのである。

嗚呼、舊人は、無我無中であつたが、其中には無意識があつた。新人は、議論斗り、喧嘩斗り、お騷ぎ計りして居るが、薄弱なる有意識で、まだまだ無意識迄に遠く達せぬ。嗚呼、無意識よ、無意識よ。汝、其の翩翻たる天の翼を擴ろげ、悠然舞ひ下つて、神洲の風光に浴し、睡不睡の間、吾同胞の胸襟に入れよ。眠れよ、吾同胞。睡めよ、吾同胞。睡むるが如く眠り、眠るが如く睡め、瓢々乎として彼の無意識界に逍遙遊せよ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

武術流行の機運

附。女學校の薙刀科

維新の政變後、武夫常職を解き、士流帶刀を外づしてより、一時滅火の如く成り行たる日本固有の武術は、數年前來漸やく再起の兆を見しつゝありしが、今や既に流行とも云ふべき機運に到着せり。之れ、歐米各國近時大いに體育隆盛を高むるに際し、同胞端なく古來の國粹に回顧して、茲に其の復興を要求するもの大に增加したるに由る。況んや、西洋に行はるゝ體育は、大率ね、隊伍團結を好める西洋人の趣味と共もに發達し、東洋個人的の習慣者に適はず、尚ほ未だ日本人の快樂と相伴なふと能はざるをや。則はち、日本體育會の事業の存外に進歩せざる中に、日本武德會の根底の極めて深きを致せる所以、一源因茲に存す。而して此の大勢は亦た女學界にも推及ぼし、女流薙刀の演武、今や府下各女學校に採用せられて、之も亦た次第に普及せんとせり。

左れば方今、各高等の男學校にして、武術の道場を缺くものは、甚はだ稀なり。而して、所々に開かるゝ一年數回の共同演武會に於ては、活潑なる學生青年四方より集り、眼鏡を掛けてすら面を冠ぶるもの極めて多きを見、人をして一種異樣の感慨を催ふさしむ。もし武邊篤志の士にして此の光景を見ば、今昔盛衰の變を思ひて、密かに感泣せざるものは稀ならん。

附て曰く、直眞陰第十五代歸山環先生、近頃「武道小話」一巻を編著せらる。吾人曾て其門に遊べるの緣に因り、一序を添ゆるもの、左の文なり。茲に附して、斯道に對する隨感の一とす。曰く、

心手相ひ一致せざる、萬人の患なり。則ち、心よりして之を敎ゆるを文とし、手よりして之を敎ゆるを武とす。文武分れて二なれ共、茲に圓滿靈妙の化を遂げんとを旨とする、古今學問の大道なり。

武は、身體に就て化育するより始む、故に之を實行に伴隨せしむ。擊劒戰鬪の世に於ては、武夫刀を用ゆるを第一の實用とす。則はち、武藝を以て武道とし、而も之に生命ありたる所以なり。

方今一般の人、劒を撃つの實用なし、則ち實行に伴隨せしめ

て劍を學ばんとする時は、遂に技の末に走らざるなし。今や武藝の人ありて武道の士尠なき、亦た已を得ざる也。

然らば、武の藝術也た用なき歟。曰く、斷じて然らず。若し我國躰育なかる可らずば、則ち遂に武術なかる可らず。惟ふに日本の武術は世界躰育中の第一列に位すべき也。但だ吾が言ふ所の躰育は、眞大の躰育に付て言ふ。今の躰育を言ふものは、寧ろ之を卑しくするものに非ずや。

身心相關の妙、容易く辨じがたし、人只だ不二靈契の實際を知了せば可なり。今ま人その身心に就て鍛錬せんとする時、先づ身躰の上に施行する學科の永くたゞ筋肉の上に留まり、引いて精念神靈の上に及ばずとするもの、何處にある乎。躰育は、即はち心育の初にして、又心育の大成なり。

今ま幾多の躰育方に於て、其撰を比較するに。我國の武術は裕に、明白に、其第一等段の中に列すべし。其長所の一に曰く、偏滿に身心全躰の注意力を惹く。二に曰く、或は有意識的に勝負の氣を起し、或は無意識的に血液を躍らせ、以て壯快なる活動の感覺を呼起す。三に曰く、一氣、一息、一聲、一躍、一擧手、一投足、みな靈心と契合し、遂に心手一致の妙地に至らしむ。凡そ此の三は、總ての躰育に於て皆な理想とすべし、則はち幾分成就せざるなしと雖ども、我國の武術は、之を達するに於て、特に尤とも壯快に、又甚はだ確實也。

古人武を學ぶに於て、常に勝負の有念を去るべきを說けり。夫れ、武術の實用ある、昔時に於て尙ほ然るを知らば、方今其の用なきは殊に明らかならん。況んや、君子之を用ひて、高尙なる躰育に資せんとする時、何すれぞ勝敗利鈍の末に拘泥して、靈劍の妙用を忘るゝとをか爲す。

夫れ、劍は、心形の刀なり。然れども、劍あり反つて心を忘るゝが故に、亦た無刀の刀を擇ぶ。無刀の刀、是れ無心の心、武道極意の妙諦なり。

今ま一人と相對して起つ、假に之を敵として、肅んで之に對すれ共、渠の而も我敵たるは、我之を敵とすれば也、我心もし我に隨がつて一ならば、何んぞ渠が敵たらん、渠も亦我一心なり。

渠の劍、吾頭に下る、苟くも之を避る莫れ、自からにして避けよ。吾劍、渠の頭に向ふ、暴りに之を擊つ莫れ、自からにして打て、無想にして擊ち、無念にして受るは、則はち心手

一致し、更に心手相忘るゝの玄妙なり。
心直なれば、姿勢直なり、劍亦直なり。心、明亮なれば、其聲、朗らかなり、其態亦清し。
我心高潔清朗、且つ自からにして撃たば。撃ち得ずとも心裏海濶なり。渠の撃つ所、眞向に我に下り、其の撃つに邪なきのみならず、我が之を受るに於て亦邪なくんば、我は眞二つに切割らるゝとも、莞爾として死す。之を成佛の境と云ふ。
如斯く思ひつゝ劍を執り、而して此の思ひをすら沒却す。而して會心の友と相對ひ、更に互格の友と相撃つ、人世の快事何ものか之に比せん。
嗚呼、武術は躰育の精を集め、武道は修養の靈妙を存す。古より法師の之を樂しむもの多き、宜なる哉。
古人は時として山に隱れ、野猿飛鳥を侶とし、或は山果を喫ひ、水を切り、飛行して雲中に往來せり。抑そも此等の徒、何をか爲せる。他なし、多くは、武の心法を鍛錬したるもの也。彼等如斯して一代一手の妙手を自得するとあり、而して其形式、後に遺されて、所云る型となる。型は是れ達人自得の記錄なり。豈に輕々看過すべけんや。吾人謹んで其精神を酌み、其生命を吸ひ、直ちに先哲の胸秘に入て、悟達の妙契に接せば、鈍骨忽に會して、細花劍尖より開く。

隨感

○執拗きあつさ

暑き時は、ごく／＼熱きこそ、善けれ。身を燒くほどにも思はれて、天道の意地惡さ、斯迄に苦しむるかと不平言ふ中にも、何となふ一種の快感はあり。滿腹、之に抵抗して、淋漓之と戰かふ如き心地の爲ればなるらし。かの、むしあつきが中に、折々、生ぬるき風を送りて言譯し、冷やすと見せてまた蒸し、雨降ると見せて又照り、半硬半軟の躰にて吾に迫り來る敵こそ、心地惡しくも又惡々しけれ。

○一陣の清風

一陣の清風、萬重の敵の包圍の央より驅け來る。喩へば、單騎敵に圍まれたる時、鄉の生兵が吾を救はんとて馳せ來れる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

が如し。

○夕ぐれの凱旋

既に一日の暑と戰かひ了り、暑は退ぞきて、我は健在せり。則はち、汗血にまみれたる戰の衣を脫ぎ、一洗沐浴して、輕衣を着す。端近う出でて、庭前に向へば、細枝大葉亦等しく勝ち得て、今徐むろに葉衣を伸べ、銀月微かに樹間より漏れて、吾が劍の寒けきに對す。暫らくして虫吟じ、吾が爲に凱歌す。暫らくして、露滴たり、吾が爲に泣く。嗚呼、暑は如何に酷しくとも、吾を殺さず。吾は必らず勝つべきもの也。吾必らず勝つと信じて、終日暑と戰かふ、亦快ならずや。蓋し、人世の戰かひ、大抵この類のみ。

○拂曉、戰鬪の準備

夙朝、曉を拂つて起き出で、家犬の欣こび狂ふを從がえ、園内を一週す。樹木微動して吾を歡迎し、其葉伸々、胸襟を開く。日光、横さまに來會し、門壁皆な明く、樹梢いよ〳〵青し。書生の早起するもの、水を汲みて衣を濯ぎ、校僕連りに、戸を開けり。園庭滿地の新綠、露を帶びて皆清く、何處に吾が足を汚し行かん。一週して家に歸り、老鷄、雛鷄の躍り樂しむを見て、いざや我また酷暑と戰かはん哉。

○道の案内

知らざる道、初めて行く道などを案内しくるゝ人あり。之に伴なはれて行く折柄、其人存外にも不知案内にて、所々立つて考がへ、亦た他に聞き合せなどしけり。心細さと、言はん方なし。若し、法師、敎師にして、かゝる道案内せば、誰か之に信賴せんや。

○源平盛衰

源平盛衰の時、今を去る大凡そ七百年と雖ども、其文猶ほ昨日の如く、其壽今に久しきが如し。而も、平相國、武臣にして初めて大臣となりしより、一族壇浦に亡ぶ迄、其間少かに十九年。彼大頭子之に代りてより、公曉鎌倉八幡公孫樹の陰に金槐集の歌人を暗殺する迄、やうやくこゝに三十五年。同もに薩長政府よりは短命なりしぞ奇しけれ。此際最とも人心

をして敬せしめ、七百餘年の今日、潸として其の苦心に泣かしむるもの、獨り小松殿其人にあらずや。加ふるに、周邊幾多の誠士あり。平氏の末路は、必らずしも源家の如く猥虐ならざりし也。而して一朝にして沈沒す、豈に勢にあらずや。

○小松殿の苦衷

由井正雪も亦た一代の才人なり。彼が、小松殿の評傳を爲すや、左の如し、

治承元年五月十六日の夜に、能登守敎經、小松殿へ參られけるに、其夜、彌平兵衛宗清、惡七兵衛景清二人の者も參じて、大臣へ申上られけるは。この比、京中の樣子を見聞仕候に、一定法皇の志は當家を亡さるべき御企と見え申候。其故は、先づ新大納言殿、近年武具戰術の御用意、是只事ならずと見え申候處に、和ともなふ者ども、俊寛僧都、西光法師、式部大夫正綱、判官信房、平判官資行、近江中將蓮淨、山城守基兼等よる〱鹿谷へ常々寄合候處に法皇も時々御幸なる事是唯事ならずと見と申候、其上京童の口說、似合敷禍言を申傳候故に、御思慮あるべき旨、各一同に申上たりければ、大臣きゝ玉ひ、各申さるゝ條、實に似て實なし。成親兵具を調らるゝ事、これ有といへども、一定謀反なる事知れがたし、兵具を調らるゝに付て、定めて謀叛なるべしと推するのみ也。又鹿谷へ人々寄合て、法皇時々御幸あるよし、是も實也といへども、誠に當家亡ぼさるべき、企とのみ定むべき證據なし。推量は疑ひの心より起る、疑の心を以て事を成す時は、事みな當る可らず、たとひ其事、實也と云ども未だ證人なき中に如何んぞ事を起すべけんや。もしかやうの亂事を企つる人有と知らば、猶ほ其志を信にして、政を正し、士民をしたしむべき策こそ有べきものなれ。されども各質もかやうの處に心をつけられける條まことに神妙に存知候。重盛が常々思量めぐらし候事は、只だ禪門（淸盛の事）の御志の不實ならざる樣に、次には士民の勞苦を濟ふべき事こそ、晝夜のむねとして片時も擱く事候はねと、申されければ、景淸謹んで申しけるは、仰を承候に、誠に君のおぼしめされる如くんば、今更何事かさせる亂事の候べき、なれ共、事はつゝしむに加かずと申候へば、御油斷あるべき事とは存じが

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

たし、其故はいまだ關東には流人兵衛佐賴朝など申す源氏其外、彼殿原の弟ども、未だ行末の死生定めがたく候へば、其外源家の郎從どもには、佐殿の一族ども、あまた候よし、次には近年關東の武士ども御當家を背く志ありなど承り候、かたく／＼もつて慮あるべき御事、愚案の至に存じ奉候と申ければ、大臣きゝ給ひ、汝が申處、誠とに理に當れり、唯恐るべきは關東、貴むべきは法皇なりと仰せられければ、景淸は淚を流して退出す、又宗淸は微笑して去る。其跡にて兩人が事を能登守殿に大臣問ひ玉ふは、今ま我、景淸に向つて恐るべきは關東、貴とむべきは法皇也と申しければ、宗淸は微笑して、景淸は泪を流して退出す、この兩人が心を知るやと問ひ給へば、教經の云く、他の耳目あり、天の四智あり、如何ぞ只今申べきと申されければ、大臣又微笑して入り給ふといへり。

嗚呼、賢者の苦心斯の如し。才人の古今を洞觀する亦斯の如し。人は、學びざる可らず、政は誠實ならざる可らず。

十方世界 唯信能行。

文明風家庭の破壞

◎新らしき西洋風が這入つた爲に、秩序を増し、平和を增し、又、快樂を増したるものは、何々である乎。其の多くは、反つて反對の現象である。つまり、他日に於ては、或ひは其の好結果を得べきならんとも信ぜらるゝが、兎に角、今日に於ては、惡結果である。此は是れ、進步の道の半途で、何事にも免がれがたき移り行であると申さば申せ。要するに、今は不秩序、不平和を增したに相違ないのである。

◎然るに、此の大勢の中から外れて、獨り、家庭のみは、西洋風の輸入の爲に、平和を增したと思ふ人のあるは奇しむべきである。よし又、今既に之を増したと云ふにあらずとするも、西洋風輸入の爲には、是非、家庭の平和を增すものゝ樣に考がへて居る人が多くある。西洋風に贊成せざる族すら、兎に角、西洋の家庭は樂し相なものだと思ひ込み、家庭を西洋

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

風の體裁にさへすれば、快樂平和は是非增すものと信じて居られる。眞とに是れ憫れむべきの誤解である。

◎德川氏時代、人に階級を設け、上下主從の掟を嚴そかにした頃は、兎に角、平和でした。たとひ不平があつても口に出さず、勘辨もし、辛抱もして、こらへて居たもの故、兎に角平和であつたが、四民同等と云ふ觀念が這入つてからは、世の中が非常に騷がしくなつた。もと屈服したものも理窟を言ひ、御無理を御尤ともとして平和を裝ほふたものも承知しなくなつた。即はち、世は騷々しくなつたのである。

◎左すれば、日本風の家庭で、妻は夫に從がふべきものと確定せられた時代の方が平和である乎。又は、夫婦同等で、夫々固有の理窟を主張すると云ふ西洋風の家庭が平和である乎一と度び考がへれば、直ぐ分るではないか。然るに、平和は必らず西洋風の家庭に斗りあるもの丶樣に考がへる人の多いのは、何故である乎。

◎必竟、コレ外面斗りを見て評判するからである。西洋人は交際を重んじ、其家庭を公開してお客に見せるからして、夫婦の間を至つて中の好いやうに見せるヿが上手なのである。

日本では、男子が女子の言ふヿに迷はされぬと云ふヿを一つの誇りにして居たから、人の前ではワザト冷淡らしく仕て見せるのである。双方とも虚飾に過ぬのは一つである、然し實際喧嘩の少ないのは、日本の夫婦であらふ。之は必らずしも賞めて言ふのでは無い、たゞ一方が他方に屈服したからである。

◎西洋人の夫婦と云ふものは、存外、中の善くないもので、又、夫婦になつてからは、左程愉快なものでもない。彼等は愉快相に仕て見せるのであるが、實は必らずしも左樣では無い。夫故、彼等は連りに外に出て交際する。めい〳〵外の交際に耽つゝ、幾分か家庭の衝突を忘れるのである。實相を觀じて見ると存外のものである。

◎夫故、家庭の平和を求めて之を西洋風にすると云ふは、ちと見當違ひである。凡そ、平和なるものは最後の理想ではない。晴天風なきが、年中の所望でもあるまい。平和善き乎、破壞善き乎、「吾は刄を出さんが爲に來れり」と言ふべき時もあつて、夫は皆な時の要求、世の勢と云ふものである。然し兎に角、平和を希望するとして、扨て其の希望から、西洋風

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

を所望すると言はゞ、夫は確かに見當違ひである。

◎惜しむべし、世間には、此の見當違ひから、無益に其の家庭を破壊しつゝあるものがある。夫は、必竟、西洋人の夫婦を買ひ冠ぶるからの事である。

◎凡そ、眞の平和、眞の和樂と云ふものは、西洋風だの、日本風だのと云ふ、風にあるものでない。風はカゼの如きもので、どつちにでもなる。眞の平和、眞の和樂は、男女其人等の心得方と、人格とから來る。苟しくも、道に於て修むる所ろなくんば、如何なる風にしても、其の家庭に祝福の下る筈は無いのである。

紀念の日記

亡き齋藤冬子（正則英語學校長齋藤秀三郎氏令妹）の爲め紀念會催ふすとて、去る月當年同窓の友どち打寄り、互みに故人を語り出で昔を忍びける折、同子が物せし日記なるもの取出で、朗讀せり。其の一節二節を左に抜きて、一には女生日々の感慨を見し、又一には亡き人を懐ふ同友間の永き記録となす。某、引。（冬子は當時明治女學校高等科にあり）

明治廿六のとし、文月初めの九日。

幾度か始めむとしては久しくためらへてし日記てふものを、今日よりは怠らでものせんと、筆とりぬ。我日記よく〳〵、汝が怠は、我死なり。願は、一日だも怠るなかれ。

同十一日（半晴半雨）

かげろふの命短きを知らで、孜々として此の世の事にのみ心を勞するは、そも〳〵吾人の一大過失なり。悠々たる脱俗の士は、如何に心の長閑なるらむ。

今の世に人らしき人は幾何あるや、多くは雷同の徒にして、人の叫ぶ時に叫び、人の靜なる時に沈み、而も一の主義あるはなし。首を回らして女界を凝視せよ、彼は徒らに情を說き、愛を語る。然れど哀しむべし、其の考ふる處、思ふ處、噫我は女界の一分子なることを思ふ時、實に背をうるほす所以は何ぞや。小刀をもて些々たるあやまちを切り去らむと試むる事勿れ。寧ろ自己てふものを神に近づけ、キリストと同化せむ事を力めよ。けふ我を訪ひ來し友を見て如何なる感を起せしや、彼又女界の分子なるを思へよ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

つらく我前途を察し來れば、濛々として恰かも五月雨の空の如し。去れど、雲のかなたに照る日あり。濛々たる空を打まもり、何時の日に晴れやむと思はんより、曇りたる日に於ては、其日の業をせよかし。

同十二日（雨降）

人の此世にある限りは、何等の點に於てか不滿あるは當然なり。そもく此の不完全なる社會に生れて、學校にもあれ、敎師にもあれ、完全なるを求むは誤りなり、と知りつゝ常につぶやくは、小人の爲す處なり。我よ、汝は何故に心にもあらぬ事まで輕々しくは口に出すや、愼しめよ、目を醒まし祈らずや。汝が朝暮考ふ所の如何にいやしきぞや。斷ちきれぬ情をきり、忍びがたき事を忍ぶは、汝が常に務めむと志ざす處にあらずや。暫らく端座瞑想して、汝の目的をとくく定めずや。人は己を敎育せんが爲に此世に在るを露忘るゝ莫れ。如何に五月雨なればとて、降る雨は得意然としてわたらふ人々をなやまし、空は夫を失なひたる妻の如き面を顯はして、旅にねるわなみらが袖をもうるほす。梅雨ばかり物淋しき思を起さしむる時はなし。

けふは尾花姉より玉章うけとりぬ。來らむ夏の休こそは、彼姉と共にあかぬ樂をむさぼらばやと、一とせがうち思ひかけしも、儘ならぬ事のみ多きは世の常にやあらんずらむ。此年は古郷へ歸るとの事、たのみ尠き世なるかな。

同十三日　半天氣、半雨ふり

透谷子、藝術講ありて、おもしろかりし。曰く、地球に南北の極あるが如く、世に喜悲の二極あり、兩者の中間に在る時は、唯々として人の人たる性情を顯はさねども、何れにても其端に達する時は、人の本性を顯はすものなりとかや。或人曰く、人の性は半面獸にして、他の半面は神なりと。つらく思ひめぐらせば、人は實に殘忍なる性をも具ふるが如し、又神の如きげにも美はしき念をも懷くが如し。如何なるものにや深く考へて其性を知らむとは、吾人のつとむべき事にこそ。人を知るは、己を知るなり（ハムレット）。

同十六日　降

終日の降りに籠められ、心裏何となふ淒然たるを覺ゆ、然れど、雨に向て物思ふは樂しき時なり、窻を開き机にもたれ、我、吾を忘るゝが如く、悵然としてみどり深きうら庭を見や

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

り、何物をか悟れるが如し、之果して何ぞや。

同十八日　半晴半雨

彼は溫和、我は粗暴、其差違の如何にも大なる哉〇〇よわなみは愼まざるべからず、學問人を造るにあらず、德即はち人を造るなり、言葉擧動の如きに至りては、さまで心を勞するに及ばずと云ふは非なり、言葉擧動をのみ愼しみて其根本を養はざるに於ては、非なると論をまたず、然れど根本にのみ着目し、遂に言葉擧動を全く外視せんは尤とも非なり、噫當今の女子愼しまざる可らず、我等は俗人よりも優れたる考へを持つものの如く自分免許せり、然れど自分等が思ふほど高きにあらず、あゝつゝしめよ〳〵、任重き我等は萬事に心を注がざるべからず。

同十九日（晴天）

噫如何せん、日毎に記す日記てふものを斯くも價値なきものとなすを思へば、人の進歩は日記によりて明らかなるべし、人は畢竟一所に止まり居るものにあらず、進歩せざれば退歩するの外なし、然らは我は退歩しつゝあるにや、宜しく反省を加ふるこそ肝要ならめや。

同二十日（晴天）

人は眞正の美てふものを看破し得べきものにや。

西行芭蕉の輩は、如何、我てふものの外の我、即はち内なる人とは、如何なるものにや、快樂とは何等の類ぞや、人は到底自由を得べからざるものにや。

同廿四日

以上熟考尙ほ其一つだに解する能はず、只だ神前にひれ伏して、大能の智識を貸し玉へと祈りぬ。

太陽と共に起き上り、部屋の中悉とく掃き淸め、洗濯などに二時ばかりを費やし、余る日は縫物にてうづめぬ。

同廿五日　晴

世に友と呼ぶ者多く、左れど眞の友はいとすくなし。僞の綱もて結びし交は危ふし、一時濃やかに見ゆるとも、忽まちさめて、氷の如し、嗚呼悲しい哉。

人の心中に潜む誠と誠を堅く結合するは眞の誠なり、一度結ばゞ解くるとなし、天地を動かさむ力と雖ども到底此の愛てふ力には敵しがたし、然ればこそ困苦は其交を深ふし、悲哀は其契を厚くし、如何なる淵に沈むとも春の日ののどやか

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に照りわたる日影の清きにもなぞらふべきにあらずや。
何物と雖ども、到底愛の力には勝がたし、神即はち愛なればなり。

牛込橋のたゞ中に立ち、水中の月を見、ロングフエローに同情を寄せぬ。さらぬだにいとどゆかしき月かげを水にうつしてながめける哉。

全智全能の神よ、願はくは我を高め給へ。此冷やかなる情を温ため玉へ。些々たる事に屈托し易き我意識を寛くなし玉へ。何事も常に爲し得る限りを務めさせ玉へ。父母を助け玉へ。かの友をめぐみ玉へ。彼の事業のあなたの御胸に適ふ様になし玉へ。彼自身を大ならしめ玉へ。思ひ艱める友を慰さめ玉へ。アーメン。

同廿六日

闇にかくれて萩の友ずれ、姉妹の間でさへ心の合はぬ折はあるに。
花も細葉も、主なき庭に空しく散る春秋。
遠寺の鐘は無常を運びて、空も何となう物案しがほに春をしらぶる黄鳥。

光瀾之觀

記錄

奥遂

次第は時の常なる者にして還旋は常の動て生道を開進せしむる者也、余の時ありて心の感ずるまゝに書するもの亦之に因る、言ざらんと欲して時に能はざるもの有り。(讀者諒)或は思ふて述るあり、或は感じて記する有り、其記述せざるものは別論、述べ了りて後ち復た思に入らざる者有り、記載を待て而して速に經過する者有り、往て時に反る者有り、反りて身に親かく、永く心と結んで新に進む者有り、夫れ物の物たる所以の者は物活なれば也、活物何ぞ死法に拘はらん、今ま記錄文稿の出沒常なく、新舊序無きが如きも、蓋し亦物その物にして世俗庸習凡制の表外に游息するものなれば也。雖然も規則無かるべからず、余等孩童に於て尤も然りと爲す、有神無我は我が目的、光瀾洗滌は我が游觀たり、余等此に游觀して此に進達せんと欲せば、宜く先づ黨心を有つべからず、偏見を除き去らざるべからず、自家自郷の人を念ふこ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

と他家他郷の人を愛するに異なる有るべからず、他縣府國の爲に務むると自縣府國の爲に謀ると其間一寸も其道を二にすべからず、日常交談の際と雖も宜く勉强苦戰以て偏倚の性に勝つべき事。

我等若し眞に孩童たらば、然く偏見偏性無かるべし、然るに孩童は、余等の望む所にして未だ至らざる者、故に余等の現狀は其偏性偏見偏行に於て如此自大自尊たり、余等若し先づ全然此の自尊自大に死して、再び嬰兒の神に生まるに非らざれば、假令萬事に萬苦して萬年に至ると雖も、到底無我に强健にして天地の大政に參する能はざるなり。

善く人を敬する者は、天之を愛し、善く人を愛する者は、天之を敬す、愛と敬とに由らざる者は、自ら天罰を致すもの也。

物質は只だ廢すべからざるのみならず固より宜く之を重んずべし、然に唯だ物に膠着しては以て生命に進む能はず、故に善に至る者は唯物の道に由らず、此に由て以て健强を全ふする能はざれば也、盖し我儕は、内にして中なる生命よりするに非れば以て善に强に成長する能はざる也、故に人の成長は誠に神々たる眞道の開新に由る者也、此れ何く自り來る、實に眞人至尊の實體自りす、法の我に在るや、宜く克己淸心以て自ら持守すべし。

我儕、孩童の神に復生せんと欲する者、宜く各々其職責の關係と範圍とに於て堅忍持張すべし、我儕の體中即ち心身の間に於て常に自ら勝つべきもの甚だ夥し、廚上又廚を爲し幾階となく此の自然界の舊生質現に存せり、此れ皆當に自ら强めて以て勝つべき者也。

我儕孩童は當に自然界に嚮つて成長發達すべき者に非る也、當に自然界に通由して高く其表外に昇り而して强天的の生命に新地上に成築すべき者也。

此れ空想に非る也、此れ實學的實業的實言也、實知は宜く將に其實體に存すべし、宜く兄弟姉妹をして我儕の身に於て交互自由にして健强ならしめよ、如此なれば則ち我儕も亦將に彼等の身に於て强剛なる實體に至るならむ。

故に我儕宜く自ら驅めて息まざるべし、宜く實際の生活に於て實際の標的を持つべし、宜く如此持張して以て其知と意と兩的一體なる體をして進んで肉體の中に建立せしむべし、所謂兩的一體とは知惠の體と意志の體と相配せるの體也、如

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

此宜く肉體の中に於て此體を擴張建成し、以て我が中に於て生命の讎敵を消滅し、而して千愁萬惱の原由を斷然全く絕つべき也、此れ救世者の眞道也。

美は善の文

美は善の文なり、厥の神氣に觀して而して天色に息する者美ならざるは莫し、美は須臾も離るべからず、故に哲人言ふ有り云く美を去らんとするは猶ほ生命を除くが如し、美若し去らば太陽滅ぶ、殘る所は則ち黑死のみと。

美は形に存して又其外に在り、ああ誰れか復た上天の載を無聲無臭と謂はん、色は色の表に貫き而して聲は聲の前きに知る、有れども無きが如きは美の温なり、遠くして近づくべきは美の親なり、親しうして狎るべからざるは美の智なり、(形)貧にして而して(神)餘り有るは美の裕なり、(欲)淡にして而して(眞)情活けるは美の淸なり、憂有りて樂みを存するは美の要なり、憤發して以て道に進むは美の進なり、靜にして動くべきに動くは美の時なり、富貴にして而して能く人に讓る

は美の謙なり、賢明にして世を(眞道に於て)救ふは美の明にして厥の用なり、信じて無我に悅ぶは美の感なり、その感に感じて而して其の悅に泣く者は美の眞なり、善く天父に事へて而して厚く天母の懷に養はる者は美の愛にして樂に至れるなり、樂焉て而してその樂を忘れ旋轉開新永遠に已まざる者は美の生命たり、夫れ善は獨り顯れず、常に他に因て文を爲し而して自他無きに至る、自他無きに非ざるなり、他を以て美と爲し而して相互尊崇す、故に(解し易からずと雖も)常に人に居り物に通じ、神氣に觀感して而して天色に生息する者は美と善とに自らざるは無し。

"In the spirit's transformation
Through the deeds that love inspires,
We shall find regeneration
From theselfhood's bain desires.
We shall keep to find a waking
In a land of fairest grace
Where the morning light is breaking
from the Lord Messiah's face."

不我之言（二）

曰く、動物的人間は悪むべし、彼等は人を毒害す、明々たる人有り、太陽社會と交際して其紀綱を體す、明活なる人は、心胸の中晴暖を興起する者也、寒凍の毒は、内體と外體との中間に入る、善く神に事ふる癒者と雖も自ら之に達する能はず、唯だ彼れは能く神に達し、而して神の生命をして因て以て夫の寒凍の死地を暖活せしむるを得べし。故に難解語に云く、我れ神を開く、爾の爲に我れ神より取ると。

夫れ貴神は、明の明たり、暖の暖たり、積極の太陽たり、嗚呼、眞に貴神たり、人乎、爾信仰する所の神は抑も何神ぞ、夫れ心胸は、陽活の要球たり、旭日の昇地なり、故に語に云く、貴神の心は爾の心に在り、而して彼れの標的は唯だ爾が見る所と、明々なる人にして而る後ち此格有り、

或人嘗て一人を問ふ、云く、彼れの友は誰たる、答て曰、彼は離れ去る、此時に於て彼に友無し、眷族會友の如きなし、人間尋常の生活を去りしより、彼は朋友を作るの關係を有せず、交友は相互協同和合を意味す、而るに彼は交互の關なし、彼の存する所は彼の自地に在り、然らば則ち彼に於て何の希望ある、曰く、既に交互の行爲なければ、亦所謂進歩的希望ある無し、彼に於ては所謂務とする所なし、地になく、地獄になく、又天にも之無きなり、天地地獄皆其法律を以て彼を絕つ、彼は天地の除名者たり、無衣の人たり、故に世の如くに喜ばず、又世の如に哀まず、彼は時に於て神に宿する者なり、

然らば則ち誰か彼に就く、曰く、無人なり、無朋なり、人の之を眺むるもの或は之あらん、之に入る者無し、天使は敢てせず、悪魔は能はず、夫れ草は玆に長じ、雲は彼に徃き、川は又流れつゝあるも、只だ此人や、現實の界より除かる、其の人心より離るゝが如し、然らば則ち彼れ何を爲す者ぞや、何の爲めにして然るや、悪む所にも非ず、好む所にも非ず、宇宙の律法の要する所有り、貴神の御旨は固より無盡藏なり、大終に至るに非ざれば、外人終を窺ふ能はざるなり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

不我之言（二）

世に未だ確然として人生の何物たるを知る者有らざる也、未だ明に人體搆造の基及び其律法如何を考る者有ざる也、

上人の言に曰く、人は如何ぞや、此れ種子也、即ち人の人たる本體の種たり、此種子の現界なる一小分質に播植せられたる者也、故に人の形は常に靈と物とを幷せて以て動く、此れ本單に些少の種子此現界の物質に於て掩はるゝ者也、故に大人と無く小人と無く、皆種子ならざるは莫し、夫唯種子也、是を以て人の能く生命に活る者は、靜息開發、生々更新、無窮に達して而て已まざる者也、

人未だ人生の何物たるを確知する者あらず、若し能く人體の根元に達観するを得ば則ち其發見する所の者果して如何、曰く、人の全體は妙門たり、所謂妙門は、生の由て生ずる所、夫れ人の全體は妙門也、而して體中萬機萬關、一として妙門たらざるは無し、譬へば猶ほ機關中に機關ある如く、所謂妙門中に又無數の妙門存す、其根元に達観するに及べば人此れ有るを見る、

凡そ吾人現界に見る所の者、原勢的に、人體中に有らざるは莫し、現界に形する者は、人體中に亦形を以て存す、靈なる者は其靈に在り、形なる者は其形に在り、隱顯亦異なる也、人體に礦物界有り、其内に於て萬種の礦物其品格其界に從ふ、人體に植物界有り、萬種の植物其内に在る者其品類其界に從ふ、又動物界有り、其内に於て衆諸の動物各其類を以て適然に畜はる、皆原勢的に人體に備はる、如此く人體は現界に在ては現界の標榜たり、

今夫太陽と地球とは、實に形體の父母たり、凡て人の其形體の權衡中止を得る者は、必ず太陽と地球との協和妙働に由て然るに至る者に非るはなし、其體中の最微分子なる者は、一として嘗て太陽の周圍に於て游生せざりし者は有らざる也、故に人生形體の基礎なる者は、皆な夫れより時に乘じて以て引致せられたる者に非ざるは莫き也、

久しぶりに再興せられた此雜誌を見るに、卷頭より卷尾まで例の一風ある人生觀を以て充たされて、其間には例の青柳有美などの一癖ある文字、才子たる文字、いづれも人の目を刺すに足る。婦人に關する多くの雜誌類が何れも〳〵纎弱浮薄にして見るに足らぬが中に、新に此一枝の梅花を得たるは、吾人の喜びに堪へぬ所である（六月十九日萬朝報女學雜誌の評）

雜録

排女役者

有美

演劇改良を口にする人の、まづ第一に稱ふるところは、女形に女役者を用ひんとするにあり。この種の人々以爲らく、女形に男子の俳優を用ふる如きは、是れ不自然の甚しきものなりと。

曾て、某先生に謁す。先生も又女役者採用に熱心なる人なり。先生曰く、男子にして若し女形を演ぜんか、未だ其役のこゝろを得るに至らずして身まづ疲れ、男子の生理躰を以てして女子たらざるべからざるに多大の勞力を空費し、爲に其持役を演じて充分其こゝろを得る能はざるに至ると。又曰く、男子は女形に扮して髯に邪魔せらるゝこと多く、如何に之を削る數々なるも全くこれを見えざらしむるに難きを以て、勢ひ白粉を塗ること厚く、其極鉛中毒に罹るの不幸に遭遇せざるべからずと。

先生の言一々理あり。滔々たる世間の愚者素よりこれに和し、

その歐西演劇界に行はるゝを名とし、これが主張に力むること甚だ盛なり。されど、此くの如きは是れ一種のハイカラ思想にして、未だ女性本來の性情を知らざるより來れるものといふべきか。

俳優に於て重しとするところは、いふまでも無く客觀に同化する一事にあり。即ち市川團十郎も一たび俳優として舞臺に立てば、團十郎本然の主觀を棄て、其固有の性情と其『我』とを全く沒却し、今將に演ぜんとしつゝある持役のこゝろとなり、其役の觀念を取りて、總て我が觀念となさゞるべからず。是に至りて其演ずるところ始めて活氣あり活動あるは、能く人の知るところならずや。

それ女人は其心意力の發達甚だ幼稚にして、稍々小兒に似たるものなり、世の皮想淺薄なる論者、往々女人を以て男子に勝れる同情ありとなせども、實は小兒の同情に乏しきが如く、女人も又なべて同情に乏しく、胸中たゞ主觀あるのみにして、些かも客觀の反應なし。此くの如く切りに主觀に拘泥するのみを以て其生命と爲し、我心の勃々たるものゝみなり、女人をして、全く其『我』を沒却し脚本中の人物に同化し、客

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

觀を我が心のうちに移して主觀に代らしめんとする如きは誠にそれ難哉。

もし、女形に扮する俳優の責務に、たゞ其相貌を女子にするのみならば、男子の到底女役者に及び難きものあるは、素よりいふまでも無く、女子は女形に扮して最も成功するものに相違なしと雖ども、若し主觀を棄てゝ客觀に同化し、脚本中の人物と之を演ずる役者との間に無限の同情感應なかるべからずとせば、女役者は女形に於ても到底男性俳優と競爭して劣敗者たらざるべからず。即ち男子は解剖上及心理上より扮する多くの不便を淩ぎなほ且つ與えられたる客觀に同化し、巧に女形をコナシ得るなり、女性に非ずんば女性を扮して眞に其心氣感情を寫すに難しといふ如きは、これたゞ己が胸中に藏する勝手なる主觀を其儘にし、些かも客觀に同化することなく自然有の儘の女子を以て舞臺に出でなば、玆に女形の能事終れりと爲す淺見ならんのみ。蓋し、演劇に主とするところは、普遍性の發展に非ずして個人性の發揮にあればなり。而して、女役者の女形は女性の普遍性を發揮するに止まりて、與へられたる女性の特異性を發揮し得るものに非ずこれ明に女子が俳優としての失敗ならずや。

加ふるに、古往今來女子の未だ曾て美術家として偉大なる成功を觀しもの、一人だにあるなし。果して然らば、美術中にありても最も複雜なるものなりと稱せられ綜合美術の名さへある演劇界に入りて、玆に獨り成功するの所因あらんや。詩歌と音樂と彫刻と繪畫と建築とに失敗せし女性は、又演劇に於て失敗すべきものなり。

故に以爲らく、女性は演劇界より排斥せざるべからずと。

田舍

黑光女史

嗚呼田舍よ汝は如何に陰惡で猥褻なるよ我は汝を追想する毎に一種云ふべからざる不快の感を喚起せざるを得ざるなり、何となれば汝は自然といふ假面を被りて世馴れぬ我を虐待しあらゆる手段を以て欺き遂に回復し難き絶望と無限の怨恨とを懷きて再び萬丈の塵深き都に舞ひ戻らしめたればなり昔は多くの詩歌小説に依りて如何に汝が質朴正直なるかを奇想したりきロングフェローの詩は宛らパノラマの如く油繪を展べ

たるが如く常々我胸裏に畫かれき、又嘗て鎌倉に參籠せる頃そゞろ歩きの歸途とある畑の畔道に鋤鍬を投じてベタリと坐し遙か彼方の磯馴松を眺めつゝおさつを嚙りつゝある四人連の農夫親子を見たりし時如何に田園生活の興味深きに恍惚たりしか、女に生れてなまじい得も及ばぬ野心に驅られ或は理想のラヴのとあたら血を湧かして夢に夢を重ねつゝ都人士の冷酷に飜弄されんこと到底長く得堪ふべきにあらずむしろ水清く綠深き山奧に隱れて世を忘れ世にも忘られせめては思ふ存分價なしに自然の美を貪らば如何に我世はのどけく心安らんと思ひぬされど〳〵我望は終へ空しかりき、汝の質朴と見しは心の謂ひにあらずしてむしろ生活の程度低く劣れるなるを悟りぬ、時に汝は都人士の夫よりもより多くの僞りを云ひ都人士の專有とも謂つべき御上手は却而汝等の最も妙を得る所なりしかも上都て無骨に愚直を裝ひて、夕陽將に西山に沒せんとして鳥の塒に歸るを見るも汝は何等の感じもなく、春將に暮れなんとして野も山もねむたげに淡くボンヤリと、黃き畑に蝴蝶の戲るも更に何等の念頭に浮ぶものなき劣等人種なり、耕して食ひ食ひては耕し肥臭き襤褸を纏ひて五十年の人生を夢の如く無意味に空費し去る汝は恰も藁の上に生れて藁の上に死する犬ころの如し、玆に進步せる而かも利多き新事業の目前に橫るあるも資を投ずるの才覺なくして空しく好機を逸す、日本の人口年々歲々增加して耕へすに地なく働くに事業なく、見す〳〵恐ろしき飢餓の迫りつゝあるも他に方針を改むる巧者なくいつまでも鍬を握詰めて百姓にあらざれば天下事業なしと信ぜし其頑迷固陋なる鐵槌を以てするも猶ほ碎く能はず、今や直接の農事に關せざる人々も殆んど誰いふとなく百姓の前途を危みて、憂慮せざるものなきに御本尊は却而蛙に水を掛けたるよりも平氣なり汝の暗愚や實に憫笑に堪へざるなり。

試みに彼等が爐邊の團欒を窺ひ見よ鹽辛らき大根と菜葉の漬物を堆高く盛り馬の如くポリ〳〵と食らひ牛の如く澁茶を呑みつゝ、何を語るかを、作物の吉凶と肥料の多寡にあらずして何ぞ、其側らに赤銅色したる婦人連が小便臭き赤兒を抱きてだらしなく、兩の乳房を暴露し某家の姑が嫁を責めると誰が姙身したとかしないとか、產着は某よりも何寸何分長くして祝儀に送つたと迄て愚にも就かぬ事をさも天下の大事を談

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ずるが如く口角泡を飛ばして囀り合ふ樣は是ぞポンチ繪の好モデルならずや、筆にするも忌はしけれど更に進んで彼等の奥殿に入らしめよ、風俗壞亂は藝娼妓と所謂當世紳士の專賣特許と我も人も思へ共田舍人のそれは更に甚しく男女の膓を腐爛せしめつゝあるを知らずや、鎭守の祭りと于蘭盆には老若男女の公然の秘密として醜行を逞ふするの好機會ならずや、村の若衆が馴み女を携へて驅け落ちするはいつも御祭りの後と盆踊の終る頃ならずや、又甚しきは日頃怪しき關係ある男女が（据風呂を沸かして隣人を招くは概ね田舍の習慣なる如し）溝水の如き汚き湯に臭骸相抱いて共に入るを見てはあゝ誰か呆然たらざるを得んや、彼等が斯る汚はしき快樂を盡したる結果は如何即ち嫉妬喧嘩といつも相場は定まれり、而して更に驚くべきは處女の純潔を破るよりは有夫有婦姦の犯罪優勢を占め殆んど戸毎に行はれざるはなきなり之れ萬一罪の子を宿したる塲合に好き口實を設け得るを以てなり又○になり相なことならば妻の不貞操をも默許して私かに己が懐を肥すものもあり、舅が嫁を耻かしめ姑が婿を奪ふ不倫は聊かも珍とするに足らず、彼等の醜猥を擧げ來れば大概ね此の如し。

都の藝娼紳士は彼等の醜態を蔽ふに美衣美服を以てし紛々たる臭氣も香水とコスメテックとを以て凡てを胡魔化し去る、醜は同じく醜なるも幾分か美術的に風流なる點なきにあらず、田舍人の醜に至りては無作法むき出にて、其間に綾もなく光澤もなく始めより肉慾に突貫する荒らき猿の如く也。汝田舍よ汝の心臟は飴の如く冷かなり其朴氣朴直と見ゆるは汝が美はしき皮想にて内は譎詐僞善に充てり。其正直らしく見せて其實然らざるほど癪に障るものなきなり、ラヴに破れたる青年、事業に失敗したる人々よもし世の懊惱煩悶を免れんと思はゞ山に遁る勿れ海に避くる勿れ都の眞中に輕薄なる都人に打交りて全身綿の如くなるまで勞働せよ勞働は病的心身を癒す萬能膏なればなり、ウオーヅウオースの詩に迷ふ勿れロングフエーローの歌に醉ふ勿れ再びいふ世の煩ひより避けんと思はゞよろしく田舍を去つて都の生活に復れと。

陳語新嘯

鷗村

●女性を誹謗して文を賣るものあり、醜陋厭ふべし。武士の風上には置けね奴、女性専門研究家某と廣告する愚物あり、これ人間の屑なり。

●今の女子は男子らしくなりたりとて、之を非議する輩は、多く、男子の權限を高して女子の爲に侵害せられんことを憂ふるものなり。而して此輩、往々女臭を帶びて自から悟らず。女性の男子らしきはなほ取るべきあり、女臭ある男子は之に唾すべし。

●深刻なる譏刺と、痛快なる滑稽は、愁涙の中、嚴正の中に在りて始めて之を見るを得べし。獲麟の筆即ちこれなり、アントニーをして語らしめたる沙翁がシーザー吊詞は即ちこれなり。

●博識にして嚴正、熱情ありて溫健、而も機智諷刺に富むは、新渡戸博士の人格なり、其文章なり。『武士道』は博士の人格の圓滿に發展せるものなり。

●予の知れる人にて、琴城先生の如く、仙骨を帶びたるは無かりき。先生の前に在るや、自から俗臭の脱却する無くんばあらざりき。先生擔石の貯へ無きを憾みずして、道に精しからざるを憂へ、文を鬻がず、字を賣らず、功有つて名無し。先生は上代の風なり、今人の流にあらず、彼の紛々たる俗書家須く先生の靈に耻づべし。

●古への文士の文を惜むや、多く其稿を燒いて遺す處少くして、傳ふること久し。今の文士の文を惜むや、零々たる愚言陳語を愛して、幾度か活版小册を勞し、書林を煩はす。彼の家には賣るべき反古も無からん。かくして、傳ふること、彼が死後三年に及ぶもの殆ど稀なり。

●古への人、多く語らずして深く悟り、今の人、多く聞いて僅かに皮想を解す。辭巧文麗にして、默契靈悟の機に害あり。

●雇牧師の說教、何文錢を値ひするものぞ。彼等は悟らずして、自から欺くものなり、之に聞くは信仰に害あり。予は漫りに神の名を讃へて、神を瀆すものを耻づ。

●「われを信ずるものは滅ぶること無し」と、嗚呼何等の大確信ぞ。山を動かすべく、海を移すべし。この確信あるもの

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は信ずべし、念彼觀音力、刀尋段々壞、この確信力を確信するものは、必ずや凶刄身に及ばじ。

◉原罪說の迷妄は信者を惑に陷るの功あり、愚夫愚婦を敎會に誘ふて、愚なる說敎を聽聞せしむるの好方便なり。

◉煙草を喫み、酒を嗜み、小惡萠すことある、これより免かれんことを祈るを救を求むと云ふ。基督の救と云ふはこれしきの事か、扨てもケチ臭き事よ。

◉文法章句の末に拘泥して、其本を忘るゝこと、今の英語敎師は猶ほ古への漢學先生の如し。

◉演劇の妙とは、俳優無く、觀客無く、實況宛がら現出するが如きを云ふとは、未た劇を知らざるものなり。これ、劍を揮つて舞臺に跳り出づる田舍武士の芝居見物のみ、俳優の枝あり、觀客の目あり、相合して、其術の妙を悟る處に、劇の美は存す。單に實地に在るが如きを妙と云ふか、田舍の婆々は、大根役者の芝居にも淚を流して、己れの觀劇者たるを忘れ、彼の俳優たるを忘るゝなり。

追懷

浪華のやなぎ

金殿玉樓も、賤が茅屋も、夜を護る神は一樣に音づれて、木も草も、空も水も今や平和の夢の最中にあり。天地閒寂、四邊寥々、世に罪惡なく榮譽なく、喜び悲しみ、怨、怒、凡てを心外に葬り盡し、忘れはてゝ夢魂暫らく天の樂園に遊ぶ。嗚呼美しき夜の境、扨も靜肅なる時は今三更。

光滅せんとして或は明く或は暗く、實に人生のそれにも似たる殘燈の影、端坐瞑目、胸を衝て迸り來るは、それよ、昔は夢か、夢が昔か。過し十年思へば眞に若いものでした。希望は胸に燃へて居ました。名譽は行先の光となつて輝き渡つて居ました。戀もありました。理想もありました。世間に出たら斯うして彼樣してと、天晴れ處世の術まで考へた積りで、無邪氣な、可憐な、活氣に滿ち〳〵た身體で、いかに樂しう最後の學校の門を潛つたでせう。

空想、あゝ空想でした。今になつて振返ると、それは皆實世間と掛離れた、所謂寄宿舍的の考に過ぎなかつたのでした。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

雨にな濡れぞ、風吹くなと、高い深い測り知られぬ親の慈愛、師の恩惠、一度其手、其許を離れては。

あゝ實世間は、とても〳〵飽食暖衣、苦といへば試驗の成蹟でも案ずるより外知らぬ、書生時代のいかで夢想にさへ思ひ掛けませう。苦痛の笞、悲哀の笞。叫びました、泣きもしました、聲も得立てず、唯一人忍び音して。

希望は絶望と變じ、光明は暗黒と化し、戀も理想も、果ては我さへ捨てゝ、死の淵にアワヤの危を見た事さへありました。

が、それが攝理と申のでせうか。斯くあるべき運命が最初から定つて居たのでせうか。自分には今も左樣信じて居ますが。

浮ぶ瀬もないと歎いた涙は日一日、年一年と乾いて來ました。

全く暗に閉された天地の間からは、清い輝いた昔のそれには似るべくもなけれど、細い光も認められるやうにつて來ました。一度失せた活氣、それも稍復しつゝあるかの如く感じ出しました。

乍去、思へば十年、昨日は東、今日は西、荒い〳〵浪と風とに我生涯を任かせて、何の爲にさばかり苦痛の笞を忍んで來ましたやら、得た處果して何でせう。有か、無か。

友は情の冷えしを云ひ、元氣の衰へたるを詰責ります。が眞に衰へたのでせうか、冷えたのでせうか。若し然りとすれば、其は何が故に。人生の遂に行く彼岸とやらの第一歩こそ、斯くてあるのではありますまいか。

あゝ浮世、あゝ人生、過去を追究して徒に未來を思ひ煩ふ。一寸先は暗の世の、只今日一日の現在に安んじて、信念を守る、是か非か。知らず平和は胸に滿ちて、心穩やかに、始めて我、我を觀じ得ました

神の御心、攝理の存する處、苦しと泣き、長しと喞ちし過去の十年、實に其は只一睡の夢であつたのでした。

東山老翁勝海舟談

京都東山の麓に人寰を絶ち乍ら、室内の四壁、只海舟先生の揮毫を展張し、二六時中、膝を曲げて之と尙友談笑しつつある、一老翁の曰く、

◎初めて先生に拜謁したのは、明治二十三年だつたテ。其頃の民間の疲弊と云ふものは、實に見るに忍びんのでナ、國元

に妻子を捨てて上京したヂャテ。夫も、少し覺エのあるヿだから、是非常路の人にすゝめて、仕て貰らひたいと云ふのデナ、出て行つたジャテ。夫から、三條公、山縣、品川、松方、前田、などに會つて、言つたジャテ。其時に初めて海舟先生の所に上つたジャテ。

◎其の建白と云ふのは、つまり力農を奬勵すると云ふヿで、百姓と云ふものは、其の扱かひ方一ツデ、大變なものになる。ワシの勘定では、先づザット日本で六百萬あると睨らんでるだテ、それが年に四圓づゝ余計ためさせて、一年二千四百萬圓を作るのは、六かしくないと云ふ考なのでナ、百姓の中の精農と云ふものを勵まして、朝一時間づゝ早く出て、田畠を肥やしたら、田畠の方でもメヽでは濟ん、キット夫丈は返す。夫が年四兩にはナラシ必らずなると云ふ堪定で、ソシが實地に扱かつて見た經驗だから言ふのでナ。それにソウすると、コウモリ傘を買ふの、赤毛布を買ふなどと云ふヿは、止めるテノ、之もミンナいや乍ら、つき合に爲て居るものがある。又村會だと言つた所ろが、野の返りに、泥足のまゝ、庄屋の椽側に腰をかけて、談し合つた所ろが出來るだテ。夫に

農商務省で、勸業だの、試作だのと云ふヿがあるが、ミンナ机の上のやり方だから、田舍にゆくと、之に從ふものと、從はぬものとが、一軒の内で出來る。一家で、守舊と改進とが分れて、親子が爭そふ樣になるから、田地で少々增した所が、一家内の不折合の損亡と云ふものは、大變なものでナ。百姓の事は、ソンナやり方では出來ぬものジャテ。

◎日本は、どうしても、百姓を大事にしなければならぬテ。西洋は、數百年、練にねり上た國で、なか〳〵ソンナまねは出來ぬ。アチラがどれ程上を吹ても、コチラは地をはつて居るので、ソシテいやなヿは用いない丈で。なか〳〵西洋の眞似を一日でするヿは出來ぬと言ふのジャテ。ダガ、此の事を眞に聞いてくれた人は、海舟先生の外に無つたジャテ。

◎其時、先生の所へゆくと、上れと言ふヿで、部屋に二三人居たが、先生、アチラを向いて、名刺を見ながら、ふり返つて、「コレは、どふ云ふ人ジャイ」と言はれるから、「明治十八年に、先生が書をかいて送つて下されて、手ひねりの茶碗を添へて下さつたデスガナ」と言ふと、「アヽ、そうだつたか、何の用で來たか、江戸見物か」と言はれるから、先生、ソン

ナ氣樂などジヤア無いので、地方の細民の狀態が、如何にも見るに忍びないので、出て來ましたのです」と言ふと、「何ジヤ、ソンナ乾上る樣な奴は、殺して仕舞へ」と言はれるから、「ソウデスカ、私が山縣公に意見を述べて、詩を見せたら、山縣公は泣いて、次韻をせられたが、海舟先生は、其の細民を見殺しにせられるのです乎」と言つた。

◎スルト、先生が、「山縣が、詩を作つた」と言つて、其の詩を見て、「神鞭君、山縣がコンナ事を言つてる、」と言つて、見せられたから、其時、初めて、神鞭君にあつたので、其頃、收稅局長だつたから、夫ジヤ、敵だと言つて、色々、話したので。其日はソンナ事斗りで。先生が、「モウ一日來てくれ」と言はれたから、之は話を聞かれる積りだと思つて、また行つたジヤテ。

◎二度目に行くと、あの女が出て來て、只今御出勤の所ですから、お會ひになり升まいと、言つたが、マア言つて下さいと名札を出すと、コチラに上れと云ふとで。先生が、今日は○○先生のお出だから、一日やめる、馬を入て仕舞へと云ふとて、夫で、其日は一日お話したジヤ、結構な御馳走などをいたゞいてテナ。

◎ワシは、若い時分から諸國を廻つて、四十餘ケ國は廻つて仕舞つた。ミンナ、農政の事などを調べたので、ソシテ色々の人をたゝいて見たが、前後、海舟先生の樣な人に會つたとが無い。實に、襟懷、海の如して、夫であの眼力で、炯眼だから。私の說は、海舟先生は幕末の功臣なり、明治維新の元勳なり、日本の恩人なり、古今の良臣なり、前古未だ比類を見ずと云ふ說ジヤ。夫に、涙の多い人デナ。私等の事でも、どふにか、爲よふと云ふ心持がよく見えて居るけれ共、私は一生、物を賴んだと云ふとのない男でナ、夫に、先生を勞するとを好まないから、先生には賴まなかつたジヤテ。

◎先生が、「お前、ソレナラ、出て夫を擔當するか」と言はれるから、「私は、官途が大嫌ひて、夫にモウ其時六十四だから、擔當は出來ません、誰か爲る人があれば、ドンナ走り使でもする積りだと言つたのデナ。

◎西鄕が、あゝ時勢に乘つかつて來てと言ふものは、鬼の樣にも見えるものジヤ、夫をビクトモせず、あれ丈に押え付けて仕舞ふと云ふ、眞に驚ろくべき伎倆ジヤテ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

◎維新後の事は、夫は餘波と云ふものて。古より、家康公ほどの名君は無い。其の名君が初めにあつて、夫て、終りに勝先生があると云ふものて。先生の用は、夫て濟んて居る。其上と云ふものは、天命の許さんものデ。徳川氏の末、一門一人の血を見ない、コンナ結びと云ふものは、前古に無い。勝先生が、其結びを爲らるれば、夫て濟んだので、其上に望むべきものてないテ。

◎心中一物もないので、少こしのわだかまりが無いのだから、一日話しても、面白い。

◎先生が、「ワシャ、一つ建たいものがあるのだが、金が無ふて出來ん」と言はれるから「何です乎」と聞たら、「老人學校と云つて、アンカもあり、碁盤もあり、好なとを爲せて、老人を養なつて置く所だ」と云ふとて、「私が夫に這入たいと言ば、ソレナラ直に這入れ」と言はつしやる所なのだテ。

◎副島サンは、ソウサ、そうであらふが、どふも淸潔を好まれ過るテ、大臣と云ふものは、もつと汚濁を呑んと云ふとテ、いかんテ。新聞などの評で、かれこれする様ではナ。

◎品川サンは、ソウサ、農業の熱心家だが、脳漿の弱い人デナ。前田サンは、奔走するとの達者な人だ。

◎私は、モウすべて交を絕つて、コウヤッテ、一室を天地として、海舟先生の書斗り見て居るジャ。先生と會つてからと云ふものは、モウ誰にも會はふと云ふ人が無いジャ。

◎廿三年に上京した時の詩は、コレデ

老去東遊氣力微　此行豈爲食與衣　芙蓉峰上千年雪　蹈破凝寒見旭輝

◎海舟先生の爲に讀んだ詩と、昨日、「海舟余波」のお寫眞を見て作つたのは、之て、

獨座望千里　悵然憶昔遊　高山雲漫々　舒卷自山々
盛德何日謝　温容在兩眸　高山雲漫々　舒卷自由々
遠觀寰宇勢　叙定百年計　烱眼震雷光　襟懷秋月霽

◎廿三年、東京から歸つて、一つ摸範の村を作らふと思つて、夫から、福地山のワキの堀村と云ふに、三年半行つたジャテ。農業をすゝめ、農隙に夜學校をつくり、又試作地をこさへたジャ。三年半の内に、三人は片うでになるものも出來たヮヤ、然し都合で止めて、夫から、京都に來たが、其村には夫から七百圓ほどの基本金が出來て、今てはモウ千圓位になつただらふテ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

平言凡語（一）

有美

○歐西の詩、今や談理に走る。この反動必ずや無かるべからず。

○想像は廓大鏡なり。美術の主要は想像にあり。故に又美術の所縁は針小棒大を旨とす。

○ラスキン以爲らく、山水は人界を連想せしめざるが故に美なりと。されど、山水を觀てその人界を連想せしめざるやを思ふは、これ既に人界を連想せるなり。

○毒草は總て其色餘りに美はしきものなり。これ蓋し神經鋭敏なる人類をして其刺戟の激烈なるに厭ひ避けしめ、感覺痴鈍なる劣等有害動物を誘ひ殺さんとするなり。

○實用の發達せるもの、之を道樂といふ。

○日本人の審美心は好奇心なり。詳く言へば、骨董癖なり。宜なる哉、英語に骨董品を稱してCurios といふこと也。

○英雄にして始めて能く英雄を知るとは、是れ英雄に非ずんば英雄の趣味を解すること能はざるをいふなり。

○大人の世に容れられざるも、又大人と趣味を同ふするもの世に稀なればなり。

○趣味相同じきが故に人を愛するとは、これ其人を愛するに非ずして、我れを愛するなり。

○風は氣候の差によりて生ず。地球上の戰爭衝突、又氣候の差によりて起る。

○日本の公娼は、是れ實用の發達して美術に合せるものか。

○錄して「主たる爾の神を試むべからず」とあるは、『ノセられてたまるものか』とのこゝろなり。

○二人者ありて互に愛戀せりとせよ。より多く戀慕する者はより多く受け身となる。より多く弱點を有すればなり。

○美育とは、審美心を最も經濟的に使用する法を敎るをいふ。

獨嘯錄（二）

無美

○家の内暗ければ、外に出て運動するとを好む。故に、京都人は、存外にも出遊びを好む。

○西洋人は、家の内を暗くし、外に運動して日光に浴す。西洋人の散歩好きは、肉食の故のみに非ず。

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

○日本の家は、部屋の内迄て日光射入し、出歩きの必要なし。故に、疊を敷いて、ゆるりと寢ころぶを愉快とす。もし日本の家の疊を廢せんとせば、先づ室内を暗くすべし。

○日本人が、文明の爲に神經質となる割合は、文明の醫術が日本に於て進歩する割合よりも急激なりき。故に、西洋醫術がハイカラを全治すると、存外に少し。反て、西洋醫術は、蠻勇の人に非常の効驗あり。

○日本人は、格外に書物を有がたがり、新聞新報を格外に輕ろんず。故に、雜誌なども、書物大の大きさより、新聞紙大の大キサに近つけば、反つて安ツポク思はる。

○西洋人は、書物を一時の利益に活用するのみ、尊重せず。新聞新報を求むるとは、貪ぼる如し。故に、雜誌なども、之を大キクして新聞紙風にするとを好む。

○雜誌書物などの大なるを好むは、田舍の人、ことに百姓流の人、及び田紳なり。家も、部屋も、机も、野も、庭も、見渡す限り、馬鹿に大なれば也。

○京都に於て、赤き色の雅致あるは、ぐるりの山が青き故也。上青く、下赤し。赤松の雅致あるが如し。

○京都は、京都なるもの丶崩れつ丶あるを見る。大坂は、大坂なるもの丶發達しつ丶あるを見る。奈良は、奈良として、靜かに眠りつ丶あり。

○大坂の人力車の、日本一早く甘く走て衝突せぬは、道路狹く、往來繁きによる。

○横濱の人力車が、坂を下りるとの上手なるは、山手居留地の西洋人が、乘つたま丶急いで坂を下りる故なり。

○東京の人力車が、曲るとの上手なるは、江戸の町に曲り多き故也。

○田舍の人力車が、走るとの遲きは、道惡しくして、腰て引き、足が重くなりし故也。

○ダルヰン曰く、鴨を家鴨に比較すれば、鴨の羽根は家鴨よりも發達し、家鴨の足は、鴨よりも丈夫なり。一は飛ぶ故なり、一は肥たる重き體を支ゆる故なり。

久しく休刊せし同誌は珍しくも再び發刊せり社說には自主自由を缺ける今の時代の酷弊を罵痛し若くは女學の流行なるものが大かた只紛々たる世上風俗の好みを滿たすことにのみ汲々として教育上確乎たる成見と明白なる理想のなきを詰り其他白露の點ぜる如き隨感の諸編何れも巣鴨のこの人ならではいひ得ざることをいへり尚來月より引續き發刊する由（六月廿五日大阪毎日新聞女學雜誌の評）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

夏休中の女學生

休みと云ふ言葉が甚はだ宜しくない。天地尤とも繁昌し、万物皆な胸襟を開くと云ふ折柄に、學生ばかりが休んで怠けると云ふ筈はあるまい。此時こそ、大いに活眼を開いて、四方八方を觀察すべき、極めて積極有爲の時であるのである。西洋人などが、六十日も九十日も學校に夏休を置くは此故であるに、たゞ形式を眞似て精神を忘れがちなる我國に於て、之を眞の「休み」だと思ふは、愚極まるとである。休みとは、學校の机の上の科業が休みとなつて、之から自然界及び人事界の實地の研究が初まるべき始業であるのである。

扨て、實地の研究法は色々ある。要するに、是も亦た平生机の上で讀み置き、聞き置いたる其法方を實地に活用する樣に研究するのであるが、玆に吾等は、左の二ヶ條の注意を供して、目前の御參考と致す。

●第一● 事々に理窟をこじつけ、之が理解を試ろむべし

之は何事によらず、目前に現はれたる一事實を捉らへて、其の理窟を考へるのである。「之は、何故に斯なつた乎」「之は何故ソウである乎」「之はつまりドウなるべきもの乎」などと一々考がへるのである。迚も完全なる理解は出來まい、又、途方途轍もない奇妙な解釋が出來るかも知らぬが、夫は一向構はぬ。必らずしも直に實用すると云ふでもなく、之が天下國家の利害に關すると云ふでもない、只だ學生の研究で、他日の大用に準備する丈であるから、如何なる突飛の解釋を爲ても、少しも遺憾はない。但だ理窟をつければ善い。つけた理窟が入り用なのではない、理窟をつける理解力の活用が望みなのである。故に、大膽に、不遠慮に、熱心に、然し出來る丈け緻密に理窟をつけて見る樣にせらるべし。

之に付ての一ッの注意と云ふは、「分らない」などと言つて半途て止てはならぬ、ドウニカ、コウニカ、一ッの理解は是非つけねばならぬ、夫を爲ぬは、戰に負けて逃げるやうなものであるト、斯ふ思つて必らず一箇の理斷を決了すべし。之を曖昧不明亮に放擲するクセをつければ、反つて非常の悪習慣

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

をのこすものである。

●第二　事々に新工夫新設計を試ろむべし　　之は目前に注意したる種々の仕事に對して、「之はモ少し改良法はない乎」とか、「ドウシタラバ、か丶る弊害はなくなる乎」とか、「如何にして其新事業を起す乎」とか、「更に簡便なる經濟なる方法は無い乎」とか、自問自考して、切りに其の方案を工夫するのである。第一項に於ては、「何故に」と云ふ理窟を研究し、第二項に於ては、「如何にして」と云ふ方法を研究する。前は哲學者で、後は政治家で、前は學者で、後は實際家になるのである。例へば、郷里の吾家に歸つても、下女に對つて言ふが宜しい

私は書生で、學校にばかし居たのだから、何も分りヤア仕ないから、お前などに彼此言ふとは出來ないのだが乎、平生、本ばかし讀んで居て少しも世の中の事が分らないので、今度家に歸つてる間に習ひたいのだから、色ンなとを言つて見るから、ヲセッカイだとお思ひでないよ。そしてマア私の言ふとが出來るものか出來ないものか、一ッためして見ておくれ。どふせ出來ない相談ばかしだろうが、夫でも其の出來ないと云ふとを本當に知ると乎、また後のけいこになるのだから、

と、よく言ひきかせ置き、扨ていろ〱の工夫を爲すべし。下女などは、存外の保守家で、たゞ仕來りのまゝに行て居るもので、大した不便なとを爲ながら少しも其ワケを知らないものだから、物の置方、片付方、仕事に手を着ける前後などに、少々心を着ければ余程の便利になるとも知らずに居るもの故、女學生諸君は、其の工夫設計を申きけ、實地の試驗として之を試ろみ見るべし。

斯樣にしては實際の應用方を考がへ、其の思想を實行するの工夫にて、之はたゞに家に於てのみならず、宿屋に泊れば、其の改良法。旅をすれば車中の裝飾方。車に乘れば車やの家庭の教へ方と申すよふに、一々事に付ての思案を起し、之を當人に申して、可否をきくべし。

右、第一第二の方法は、固より經驗うすき書生の爲すとヽて、十分の事は出來まじきが、夫は一向に構はぬ。夫を恥ぢて遠慮するときは、學問と云ものは、出來ぬ、而して、兩項とも、考の出來次第、直に帳面に書きとめ置き、學校に歸つて

先生方に問ふもよし、同窓に語るもよし、又他日の再考にす

先生方に問ふもよし、同窓に語るもよし、又他日の再考にするもよし、決して粗卒にして直ぐ忘れて仕舞ふ可らず。よつて玆に注意す、帳面一冊を用意し、之を二部に分ち、鉛筆一本をよく削り、つねに傍らを、離さぬよふにして、一々書き付け、新秋學校に歸るときのおみやげとせらるべし。右暑休歸鄕の吾女生等に申しきけたる談話の一節なり。記るして他の同情者に示す。

「成功」のおしへ

「成功」の敎訓を聞かんとするもの、近時大に增加したるは、一喜一憂の二現象を見す。一は、人心の健全眞面目になりたる兆證なり。二は、人心委靡し、元氣阻喪したる兆候なり。而して、成功を說き聞かす人の多くあるも亦た、半喜半憂の種なり。成功を語りて人も先々承知して聞くほどの人物、多少にても世にあるは、喜こび也。然し、些細の所得を成功など心得、既に自慢して、他人に話聞かすものなどの多きは、憂ひ也。又實際成功したりと見なすに足る人物なりとも、夫等は一層の進步を望む。渠が自から「成功」を意識せんとは、邦家の爲の深憂なり。

信用の代現

かゝる世の樣となれば、眞僞幾らか淘汰せられ、平生心得ありしものゝ價値やうやく現はるゝものなり。此時に際しては信用と云ふものゝ尊ときは、申す迄もなけれど、扨て此の信用を現品に代へて、直ちに融通世界の通貨とならんには、信用トラストにも類する一大機關備はるあつて之を發揮融通せざる限り、容易すく活世界の實用とはなるまじ。何んとなれば、世に信用なるものゝ少なき時には、信用あるものをも信用すると能はず。黃金尤も、乏しき時節には、黃金を持てる人の黃金を實用する途なきが如し。正に是れ一新機關の勃興を切要するの時機と云ふべし。

樂しき旅行

昔は、旅は苦しきものと思はれ居りたり。故に、可愛き子には旅をさせよ、と迄て言はれたり。苦き經驗をさせんとて也。然るに、交通の便大に開らけ、客舍の安全快樂なる設備進み

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て、今や「旅は樂しきもの」と思はれ、單に遊興の爲に旅行するもの大に增加せり。之を近時の變遷とす。而して、夏の今は、年中取わけて旅行に樂しみある季節となす。

洋樂の流行

西洋音樂の甚はだしき流行も亦た、近き一二年間の變兆なり。今や、西樂を好むの趣味は、曩に洋服を好めりし流行と略ぼ相似たり。必らずしも、其價値、趣味、實用などの分りて好くものにはあらず、たゞ何となく好くなり。然れど、何となく好くと云ふ、是れ大勢なり、誰か能く之に敵せん。

華嚴の瀧

華嚴の瀧は最早神經質を刺激すべきものとなれり。假令ひ初めより考がへて之に趣むかざるものも、ふと眺め居るうちに引つけられべきほどの歷史は出來たり。警察と、僧侶諸君とは一盡力なかる可らず。

避暑のあそび

憫れむべし、ことしは海岸避暑の客も少なかるべし。

寄書

變らぬめぐみ

信陽　一女

とよ坂のぼる朝つく日
我等が上に照すなり
見る目まばゆき高殿も
めぐみの光とこしへに
いぶせき賤が軒端にも
隔てなきこそうれしけれ。

高嶺を越えて月影は
夢結ぶらん枕邊に
淋しき海士のとまやにも
母にそひ寢の幼子が
小舟たゞよふ沖の海に
なべて靜かに照すなり。

夏のあしたの露の玉
しげれる村の莚にも
朝日に匂ふ其華は
掃き清めたる草庭に
みどりの上にしたゝりて
たとふるものもあらぬなり。

年久しくも并み立てる
音なき風に送られて
鳥の調べはたのしげに
森の木々より垣根より
何を唱ふか百鳥の
朝な夕なに聞こゆなり。

深山の奥のかくれ家に
都大路にいかめしき
ひとしく受くるたまものゝ
住みわぶる身もうれしきは
いらか并べて住む人と
變らぬめぐみなればなり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

主筆嚴本捷治

毎月一回
二日發兌

音樂之友

定價一册拾錢
半年分五十五錢
一年分壹圓
郵税壹册五厘

◎音樂之友發行の趣意

『音樂之友』とは我邦音樂界唯一の專門雜誌にして、常に樂界の木鐸、樂人の指鍼を以て任じ、各欄擔任の記者は悉く東京音樂學校卒業生に依りて執筆せられ即ち現樂界無二の機關雜誌として樂人同志間の參考的機關たり、宜しく音樂教育及び音樂に趣味を有する諸君にして音樂の趣味を味ひ音樂の美妙を知らんと欲する方は一讀購求座右の參考に供せられんことを翼望して休まざる所なり、

七月　樂友社同人

音樂之友各欄擔當者

主筆　樂友社々長　嚴本捷治
副主筆　音樂得業士　堤正夫
編輯主任　東京音樂學校研究生 大日本音樂教師協會幹事　今村秀一
社務主任　東京音樂學校講師　高折周一

◎社説(記者)　主筆　嚴本捷治
◎樂理(記者)　東京音樂學校教授　山田源一郎　東京音樂學校講師　ノエルペリー
◎樂曲(記者)　東京音樂學校講師　前田久八　東京音樂學校講師　高折周一
◎音樂教育(記者)　東京音樂學校教授　楠美恩三郎　東京音樂學校卒業生　近森出來治
◎俗樂(記者)　東京音樂學校教授　今井慶松　東京音樂學校講師　高折周一
◎音樂講話(記者)　主筆　嚴本捷治
◎音樂遊戯(記者)　女子高等師範學校講師　高橋忠次郎　東京音樂學校講師　渡邊森藏
◎音樂通信　東京音樂學校卒業生にして各府縣師範學校教諭
◎雜報◎雜錄◎雜報

發行所　東京下谷區仲徒士町三丁目七十一番地　樂友社

委員　嚴本善治　齋藤宇一郎　中村千代松
講師　長谷川新一郎　川井運吉　イケレッツ　青柳有美　櫻井鷗村

切期無休

白山英學

中學各年級
高等英文學

男女聽講

ブッシング○クリスマスカロル○エヴァンゼリン○ヴ井カー○テウェルアル○沙翁ロメオ
各種讀本等其他其他

月謝[illegible]
實費金五十錢

英文添削 質問應答　十回分・四[illegible]　隨時入學

東京市神田區一ッ橋
帝國教育會内
白山英學會

海老名彈正著　四六版二二四

勝利の福音

定價參拾錢
郵税四錢

勝利の福音は煩悶不安心の社會に與ふる安慰の福音なり健全なる宗教觀は即ち是人生希望の福音なり

目次

○新武士道○上の宗教○靈的生命の勝利○天真の聲○神の顯現○基督觀○基督復活の意義○神殿とは何ぞや○聖オーゴスチンの信念

附録

○大哲フイヒテー・○シュライエルマッヘル

●●中央公論●●

青柳有美 文藝評論擔當

毎月一回發行 一册十二錢 六册郵税共七十一錢

東京市本郷區西片町十番地

反省社

ライオン齒磨慈善券附

袋入發賣廣告

ライオン齒磨　定價三錢の袋入裏面に慈善券あり此空袋を總ての慈善的事業へ寄附なさるゝ時は金錢の寄附と同一なるを以て例令一袋たりとも無益に棄る事なく悉て此新法を利用せられん事を希ふ

ライオン齒磨　空袋の寄附を受けし人に對し本舗並に大阪支店其他各地販賣店にては一枚壹厘の割合にて御買取り申すべし

ライオン齒磨　販賣店なき地方は本舗又は大阪支店へ空袋を送付せらるべし直ちに代金返送す

ライオン齒磨　空袋寄附の全部にては郵税増加するを以て裏面のみ全部切取り御送付あらば大に冗費を省くの便あり

ライオン齒磨　慈善券發行は從來の外箱其他無益の空飾を省き之に充てたる者なれば其品質に於ては之れ迄賣りたると毫も異なる事なし

注意　慈善券の處の切取たる者は無効空袋の買取りは永久實行仕候事

ライオン齒磨
高評石鹸　發賣元
東京市神田區柳原川岸廿二番地
小林富次郎敬白
(特電話浪花四九八番)

同關西發賣元
大阪市東區博勞町二丁目
小林支店
(特電話東一四九九番)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第五百十八號

（明治卅六年七月廿五日發行）（毎月二回十日廿五日）

明治三十六年六月十七日第三種郵便物認可

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY